

草庵雪夜の作

良

寛

首を回らせば七十有余年

人間の是非飽きて看破す

往来跡幽かなう深夜の雪

一炷の線香古窓の前

【作者】

良寛 寶曆八年（一七五八年）〜天保二年（一八三一年） 江戸後期の禅僧。漢詩人。歌人。越後国（現・新潟県）出雲崎の人。俗姓は山本。名は栄蔵、後、文孝と改める。号は大愚。諸国を行脚、漂泊し、文化元年、故郷の国上山（くがみやま）の国上寺（こくじょうじ）に近い五合庵に身を落ち着けた。晩年、三島（さんとう）郡島崎に移った。高潔な人格が人々から愛され、子供達も慕ったが、人格の奇特さを表す逸話も伝わっている。ただ、遺されている漢詩は陰々滅々として、類例を見ないほど暗いものである。

【語釈】

*草庵：…草ぶきの庵（いおり）。藁などで屋根を葺いた粗末な家。 *回首：…ふりかえる。
*人間：…この世。現世。人の世。世間。

【通釈】

草庵での雪の夜の詩作。七十余年をふりかえれば。この人の世の是非善悪を見破り（道理を説く）ことには、飽（あ）きてしまった。行き来する道の足跡は、深夜に降る雪のために幽（かす）かになって。一つの線香の火が古びた窓の下にある。それは、わたし・良寛の生命の微かなともしびでもある。

